

## —書評—

山本真著 創土社

『近現代中国における社会と国家——  
福建省での革命、行政の制度化、戦時動員』

(徳島大学) 荒武 達朗

中国革命に関する研究は近年大きく様変わりした。革命の前後を含めた比較的長い時間を考察対象とする問題意識は一定の地歩を築いており、特に人民共和国初期も視野に入れた研究は質・量ともに充実しつつある。だが革命以前の社会となればどうだろう。我々は往々にして以前の社会を“伝統”という言葉で総括する傾向にある。例えば伝統的なものとして宗族を扱う議論は数多い。だが、革命を通じたその残存や破壊を論ずるにせよ、そこに投影される“伝統”像は静態的である。

さて本書、山本真『近現代中国における社会と国家：福建省での革命、行政の制度化、戦時動員』もまた清代の社会構造の様態から説き起こし、革命を経て人民共和国初期へと至る歴史を見通す点で、近年の研究動向を反映したものと言える。政権が基層社会の末端にまで行政を展開し統制を強化していく過程がその主題であるが、その中では様々な構成要素が相互に作用しながら社会を変化させていく動態的な歴史像が描出される。

まず本書の内容を簡単に整理しておこう。第1章「福建南西部農村における社会紐帯と権力」では議論の前提となる清代の社会構造について、血縁、地縁に加えて神縁を分析の枠組みとして設定する。この三層構造の内、血縁と地縁の結びつきは先行研究も“郷族”という言葉を用いつつ福建の特徴として指摘している。だが筆者の分析によれば雑姓村ではこのような関係は成立しえない。そこで各姓間の紐帯として廟を中心とした関係が出現することがある。また村落レベルより広域の信仰・祭祀を通じた社会的結合も存在する。筆者はこれらを神縁と総称する。この三層構造に形成されたまとまりは“社”“保”を範囲に結んだ“郷約”(宗

族連合内の取決め)によって凝集力、さらに公的権力と結びついた秩序を付与された。

第2章「民国前期、福建省における社会の武装化と地域エリートの変容」によればこの三層構造や郷約による秩序は清末民初の混乱の中で変容し、代わって人びとの武装的結衆が進展した。著者はこの状況を「小集団ごとに武装化したバラバラの砂」と表現している。武装集団割拠による治安の悪化と強者による搾取の横行により宗族間の対立も深刻化した。在地指導者層の中からこれらのリーダーとなる軍事エリートが出現し結衆を推し進めた(第3章)。同時に旧世代と新世代との間に亀裂が広がり、新しい教育・思想の影響を受けた新式のエリートの一部は社会の変革を指向するようになった(第5章)。

第3章「福建南西部根拠地における土地革命と社会構造」の主題は福建省南西部における共産党の到来と社会の反応にある。当地では自作農が中心で尚且つ耕作権が強い為に地主・佃戸間の対立は目立たない。宗族内では貧窮者の扶助が行われていた為に矛盾が小さく、問題はむしろ市鎮の大姓による周縁の小姓への圧迫など宗族間の対立にあった。北伐開始後共産党はこの小姓家族員や匪賊を吸収して影響力を拡大した。1929年に紅四軍が進駐し中央革命根拠地の一角に編入されるものの、抵抗勢力(武装化した宗族、民団など)の力の強弱により地域支配の確立は一様には進まず、支配地域はモザイク状となった。まさに毛沢東の言うように「武装した革命が武装した反革命と戦っていた」のである。そもそも当地では先述の三層構造が社会の規範意識として存在しており、宗族の内実(族産の恩典など)によっては土地革命への動機付け(階級意識の発揚)は弱かった。さらに共産党による宗族の団体性や民間信仰の否定は、却って民衆の反感を買う結果となった。

第4章「福建省南西部における土地革命と経済構造」は地域経済や民衆の労働形態による革命の

性格規定を議論する。人びとは商業作物の栽培や副業、華僑からの送金に依拠して生計を立てていた。宗族間の格差は一面においてはこれらの有無・多寡によって生じ、経済・軍事基盤を有する宗族は共産党の支配を拒むことが可能であった。当地の伝統的産業（製糸業、煙草産業）は比較的強靱に残存し地場産業の全面的没落（通説的に言えば革命の直接原因の一つ）は発生しなかった。民生最大の危機は如上の軍事勢力の割拠と徴発の激化、匪賊の跳梁にあり、その対処の為に武装的結衆が進んだのである。また革命の担い手には山区住民の出稼経験を持ち兵となることを厭わない人びとの存在が目立つ。彼らの活動空間が革命根拠地とほぼ重なっているのは興味深い。

第5章「地域エリートと革命」では傅柏翠を題材に新式教育を受けたエリート層の活動と改革の指向性が考察される。彼は国共両党の間で立場を変えつつも地域の指導的人物であり続けた。共産党と近い立場をとったとしても、その方法論を受け入れず基層社会に自立した勢力を築いた。彼は宗族内の旧世代の指導者層に不満を抱きその支配を覆したが、伝統的な宗族的土地所有、相互扶助を否定することはなかった。彼の提唱する方法はそれと矛盾しない土地村公有という理念に基づいている。これは以下第6章「第十九路軍による統治と行政の制度化」で論ずる「計口授田」（土地国有化と使用権均分）に大きな影響を与えた。

1932年秋、第十九路軍が共産党軍より福建省南西部を奪回し、その行政機関である閩西善後委員会の統治が始まった。これは第三党など反蔣勢力とも合流し福建人民政府の成立へと発展するが、34年初頭に国民党政府によって解散させられる。第十九路軍は民軍、民団の再編と地方指導者の排除によって軍権の一元化、行政権の地域への下降を企図した。だが先述の「計口授田」政策は共産党支配が及ばなかった地域では在地勢力の抵抗の為に実施すら困難であった。政策はむしろ旧来の土

地秩序が破壊された旧共産党支配地区で可能だったが、地籍・戸籍が不明瞭な状態においては必ずしも良好な結果を得られたわけではない。結局、共産党の土地政策の成果を追認するに止まったものの、政策の試みが意識の変革をもたらしたことで、先述の傅柏翠らの土地村公有など階級闘争を伴わない土地再分配が盛り込まれたことは注目に値する。旧来の土地秩序への介入はこの後の国民党政府の統治においても継続されるのである。

第7章「国民党政府による社会管理と行政制度化の試み」は1930-40年代に中央政府の実験県でもあった龍岩県を主対象として同政府の諸政策の実態が検証される。土地政策の進展には土地情報の正確な把握など基層社会での行政制度の拡充が喫緊の課題であった。国民党政府は1934年より保甲制度の導入を図り基層社会の把握を試みた。ただし宗族組織の影響力はいまだ強く、その一方で正規の行政機構の保長の権限・待遇は充分なものでなかった為、いわば統治の二重構造が形成された。土地調査事業、自作農再編、合作社設置などの政策もこの行政の限界により不完全に終わった。

第8章以降は人民共和国期までを対象として戦時態勢下の戦時動員の実態を議論する。第8章「日中戦争時期、福建省における戦時動員と地域社会」は日中戦争下の福建全省レベルでの政治と社会の状況を概観する。陳儀と後任の劉建緒という2人の主席の下で行政の地方への下降と統制力の強化、それによる田賦徴収・徴兵確保が図られたが、戦時動員に際して国民党政府の統治は脆弱であった。糧食確保は専売制、最終的に実物徴収を通して確保する計画であったが、人びとにとっては負担の増加を意味した。さらに日本軍の海上封鎖と華僑送金の停止、治安の悪化によって民生は悪化した。加えて統治の二重構造、戸籍・地籍情報の不精確さは徴収の不公平さの拡大をもたらした。徴兵も同様に困難に遭遇し、民衆は逃亡、秘密社会・共産党への加入という形で抵抗し、社

会の武装化が再び顕在化した。

第9章「戦後内戦時期における国民党統治の崩壊と福建地域社会」では日中戦争後の国民党統治とその崩壊を論ずる。内戦期においては日中戦争期に倍加した徴兵・食糧不足によって社会不安が広がった。経済の破綻、治安の悪化、民生の後退も顕著であった。国民党は其中でも憲政への移行のために民主選挙を実施したが、結果として各派の相互対立、政治の空洞化を招いた。対照的に共産党が再び勢力を拡大し、傅柏翠らのような地方勢力、在東南アジア華僑もこれに傾斜した。同党の優勢と支配とが確立されていく過程で、これまで蓄積されつつあった戸籍・地籍情報もこれに継承され、続く人民共和国の統治において有効に役立てられたのである。

第10章「人民共和国成立後、革命と戦時態勢下での共産党権力の浸透過程」は1950年代の共産党政権による基層社会の統制強化を考察する。本書は剿匪、反革命鎮圧、土地改革を戦時態勢の一連の過程の中に位置づけている。共産党の到来に対して、地主や富農が抗うのみならず、特に宗教結社が民衆の不満を糾合して反乱を起こした。しかし第3章の1920-30年代と異なり武力において勝る共産党軍はこれらを鎮圧し、小集団ごとの武装化を解消していった。福建は対岸に台湾がある関係上、1949年以降も戦時態勢が続いた。朝鮮戦争に際しては愛国心高揚で諸政策を正当化しつつ、基層社会の統制を推進した。これにより食糧徴収、徴兵確保も可能となったと考えられる。

第11章「人民共和国成立後、福建省における宗族・伝統意識の変容と持続」では人民共和国期の宗族の組織、活動、意識の変容が概括される。旧来の指導者層は排除され土地改革の過程で抜擢された貧雇農出身の幹部がこれに代わった。族産の没収により宗族は政治的・経済的基盤を失い、祭祀儀礼などの活動も表面上不可能となった。ただし宗族の意識・観念が基層社会から消滅したので

はなく、土地改革など共産党の政策を下部から規定した面もある。宗族の組織自体の存続や弱화는一律のものではなく、それぞれ宗族の持った歴史や規範によって様態が異なったのである。

以上、簡単に本書の内容を紹介した。続いて本書及び著者の研究の意義と特徴を整理する。或いは福建という一つの地域を対象を絞り込み中国を論ずることの限界性を指摘する読者もいるだろう。だがこれは著者にとって織り込み済みのことである。地域差の大きな中国の基層社会を分析するに当たっては、まずは各地のモノグラフを蓄積がもとめられよう。また本書は福建を意図的に扱うことによって我々の共有する中国社会像に対してアンチテーゼを提示しようとしている。すなわち日本の研究者は『中国農村慣行調査』などから得られた華北社会の分散性・非凝集性というイメージの延長上に中国社会を見ているのではないか、という問いかけである。以上の要約からも福建が華北とは異なる社会であることは明らかである。著者は中国の地域的多様性に着目し、各地域の社会を内在的に検討した上で相互比較的に考察を深める必要性を強調するのである。これを第一の特徴としたい。かつて『中国農村慣行調査』を基にした研究は各地域の特殊性を述べることはなかったとしても、「中国が我々とは違う社会である」ということを広く知らしめた点において、不朽の価値を有している。我々はこれを発展させ、各地の事例に基づいて如何なる中国史像を構築できるのだろうか。これは著者のみならず多くの研究者が共有すべき課題であるだろう。著者はこれまでに福建以外にも華北や内陸諸省を舞台として幾つかの知見を公開しており、今後の展開が大いに期待されるのである。

本書に描かれる基層社会の構成要素は多様である。地域エリートから山区に住む出稼を生業とする人びと、地域内部の有力宗族（大姓）と非有力

宗族（小姓）の族人たち、宗族内部でも世代間格差により生まれた新式教育を受けた知識人と旧型の知識人など、これら多様な登場人物は階級により区分された従来の革命史研究には見られなかったものである。本書は“農民”の革命史を“基層社会に生きる人びと”の革命史へと昇華させたものと評価できる。そして彼らが生きる場については、村落・市鎮・県・省、そして故郷と強い連関を持つ華僑の住む東南アジアにまで波紋のように拡張した世界が設定されている。さらに血縁・地縁・神縁という三層構造（第1章）、並びに地域にまたがった信仰圏、市場圏、方言圏という一定の広がり意識を払う。これらが相互に重層するそれぞれの場の政治・経済・慣習などが人びとの活動を規定するものとして精緻に検討される。第二の特徴はこのような立体的な視角をもって動態的に社会を分析・考察したことにある。

この福建という場において、清末民初の混乱の中から各種武装集団の割拠する“武装的結衆”という事態が鮮明となった。1920年代以降、紅四軍などの共産党軍、国民革命軍第十九路軍、国民党政府、そして40年代後半の国共内戦に勝利しつつある共産党政府がこの世界の掌握を試みる。政権と基層社会の対峙と前者による後者の包摂、組織化に関する叙述が本書第三の特徴である。この一連の歴史的展開はモザイクのように多面的な様態を示す基層社会が一つの体制へと組み込まれていく過程であり、最も読み応えのあるところである。その一方で本書は第5章で在地の指導者（傅柏翠ら）の提唱する土地村公有に言及する。これは共産党型でも国民党型でもない、福建の社会のあり方に即した土地問題解決の方法である。基層社会は上部から組織化を挑まれる客体であるだけではなかった。未完に終わったものの下部からの社会改良の試みが述べられることで、本書はより複合的な視座を読者に提供しているのである。

さらに本書第四の特徴として土地改革、剿匪、

反革命鎮圧を戦時態勢、戦時動員の一環と位置づけている点を指摘したい。中国型の“総力戦体制”については研究の蓄積が進んでおり、諸外国のそれとの比較が可能となりつつある。本書もまたその議論の一翼を担うものと考えられよう。また現在、土地改革の経済的意義については零細農の大量析出による生産力の低迷など、否定的な論調が強まりつつある。筆者は福建においてもその状況を確認し、政治的側面に重きを置いた考察を展開する。すなわち土地改革は一連の政策と複合して社会に対する統制を強化する方法の一つであった。これにより福建基層社会における行政の制度化は1950年代に一応の完成を見たと言える。

本書は少なくとも清代以降20世紀半ばまでの長期的な視野によって福建社会の変化を通観しようとしている。これらの考察は宣教師の残した欧文資料までもを含めた各種文献、さらに福建各地から東南アジアにまで足を運んだ筆者のフィールドワークによってなされた。筆者の業績は革命史を研究する者のみならず、隣接する各領域の研究にも裨益するだろう。興味深い論点は尽きないが、最後に次に予想される著者の作業について述べておきたい。1950年代以降の展開については重要な問題であるが、著者自身も認めるように、第11章を読む限りは人民共和国期に至るまでの圧倒的な叙述に比してやや筆致の弱さが感じられる。これは資料の公開状況やフィールドワークの困難さ、“禁忌”に抵触する部分の存在によるもので、必ずしも著者の責というわけではあるまい。読者としては今後これをどのように乗り越え人民共和国期福建の基層社会に関する議論を展開していくのかを楽しみにしている。

もはや紙幅も尽きた。本書によって中国社会に対する理解がまた一歩前進したことを改めて確認しておきたい。幅広い分野の人びとが本書を読まれることを希望する次第である。

（2016年10月刊、461ページ、本体3,700円＋税）